

黄百家の『宋元学案』編纂について

連, 凡
九州大学大学院

<https://doi.org/10.15017/19608>

出版情報：中国哲学論集. 36, pp.62-93, 2010-12-25. 九州大学中国哲学研究会
バージョン：
権利関係：



黄百家の『宋元学案』編纂について

連 凡

はじめに

黄百家（一六四三～一七〇九）、幼名は祝国、原名は百学、字は主一、号は不失、また号は未史、別号は黄竹農家、浙江省余姚县通德乡黄竹浦（今余姚市明伟乡浦口村）の人、国子監生、黄宗羲の第三子（末子）、清代浙东学派の一人である。彼は幼い時から家学を受け、天文・曆法・数学などを研究した。清康熙十九年（一六八〇）、父黄宗羲の代わりに万斯同（一六三八～一七〇二）とともに明史館に入り、その専門的な学問をもって『明史』の「天文志」、「曆志」などを撰した。彼はまた奉法を習い、鄞県内家拳師王瑞伯に師事し、その伝承を受け、『内家拳法』という数学の書を著した。更に、数学家梅文鼎に学んで推歩法を習い、『勾股矩測解原』（二卷、『四庫全書』所収）という数学書を撰した。そのほかに、『体独私鈔』四卷、『王劉異同』五卷、『北游紀方』、『失餘詩稿』、『学箕初稿』二卷、『四部叢刊・南雷集』附、『学箕三稿』などの著作もあるが、一部分は目録書によると写本だけであり、また散逸が多い。更に、黄百家は『宋元学案』の主な編纂者の一人として、様々な編纂作業を残し、現在伝わる百卷本の『宋元学案』には彼の二二三条の案語（或いは文章）が収められている。このように『宋元学案』には、黄百家の重要な学術的功績と思想が含まれているが、分散していることもあって、従来それに対する本格的な研究はなされていない。そこで本稿ではその案語を中心として、『宋元学案』における黄百家の編集作業の特色について検討を行いたい。具体的に

分析する前に、まず『宋元学案』の成書過程や内容構成などについて見ていきたい。

一 『宋元学案』の成書と構成

黄百家の父黄宗羲（一六一〇～一六九五）は、明末清初の著名な学者であり、清代「浙東学派」の創始者とされる。彼は恩師である劉宗周（世に戢山先生と称され、一五七八～一六四五）の「誠意慎独」と「氣一元」などの思想を受け継いで、さらに広く書物を読んで歴史の縦横・上下を繰り返し学び、それを実践に移そうとすると同時に、明代後期の空疎でみだりに大言を放つ学風を批判した。一方で、明代儒学思想史を総括するために、彼は『明儒学案』を書きあげた。その後、儒学の発展をさかのぼるために、「晩年『明儒学案』の外に、又た『宋儒学案』、『元儒学案』を輯して、以て七百年來儒苑の門戸を志す」⁵。それから、康熙二十五年（一六八六年）、黄氏七七歳以後、『宋元学案』の編纂を始めたが、その成書の過程は非常に複雑であり、おおよそ三段階に分かれる。第一段階では、康熙年間に黄宗羲のもとで、黄氏父子と黄宗羲の門人楊開沅・顧諱・張采らが具体的に編纂作業を分担し、黄宗羲が没した後、黄百家らが続けて編纂し、約五〇の学案の初稿（黄氏原本）だけが出来上がったが、まだ完成には至らなかった。第二段階では、乾隆、嘉慶年間、主に全祖望（一七〇五～一七五五、黄宗羲の私淑弟子）と黄璋（一七二八～一八〇二、黄宗羲の五代の孫）、黄徵又（一七五七～一八二九、黄宗羲の六代の孫）父子らが黄氏原本を修訂し、三三二の学案を増補し、ほぼ完成した（全氏補本、黄氏校補本）が、まだ刊行には至らなかった。最後の第三段階では、道光年間に王梓材（一七九二～一八五二）・馮雲濠らが黄氏原本や全氏補本などの六つの版本によって訂正校勘し、道光十八年（一八三八）に至りようやく「慈溪馮氏醉絳閣初刻本」を出版した。このように『宋元学案』は、後に道光二十六年（一八四六）に『道州何紹基重刻本』⁸（現在各種の通行本の母本）が出版されるまで、多くの編者によって一五〇年以上もかかって完成した百巻の大著である。⁹

上述のように、『宋元学案』の編纂者は、黄宗羲・黄百家・楊開沅・顧諱・張采・全祖望・黄璋・黄徵又・王梓材・

馮雲濠ら約十人に上るが、黄璋と黄徹^⑩のほかの八人は現本の『宋元学案』正文一〇〇巻と巻首の中に二〇九一条の案語（或いは文章）があり、重要な編集作業と学術思想が収められている。次の表はこの八人の編纂者の案語数と出現巻数と学案数の統計である。例えば、『宋元学案』には全祖望の四〇五条の案語（文章）があり、一〇〇巻のうち九七巻、九一の学案のうち九〇学案を占める。また、巻首にある王梓材・馮雲濠の案語は統計に含んでいる一方で、二人は『宋元学案』最後の編纂者として、前の黄氏原本や全祖望補本などを編纂する際に正文と案語の中に多くの案語（補充説明）を挿し入れた。これらの案語はすべて「梓材案」或いは「雲濠案」を始めた。それに対して、二人の独立した案語はすべて「梓材謹案」或いは「雲濠謹案」を始めた。表の統計の数は両方とも数えている。

編纂者	案語数	巻数分布	学案分布
黄宗羲	八三	三四	三二
黄百家	二二三	四五	三九
全祖望	四〇五	九七	九〇
王梓材	九〇九	一〇〇	九一
馮雲濠	四二八	九一	八八
楊開沅	二三	五	五
顧昉	二四	六	五
張采	六	五	五
合計	二〇九一		

この表から見れば、この八人の中では、黄宗羲・黄百家・全祖望・王梓材・馮雲濠の五人の案語が一番多いが、更に案語の内容から言えば、各人の編纂時間の前後と学術傾向によってその編集作業には「分業」があるようである。具体的に言えば、思想史家である黄宗羲の案語の内容は主に学術討論（邵雍の象数易学や朱陸の学術異同等）と思

想解釈（太極無極の弁や周敦頤の思想など）に重点が置かれている。黄百家と楊開沅・顧諱・張采は、黄宗羲の學術思想を受けて、その案語の内容も學術討論と思想解釈に重きを置いている。すなわち文献の編纂と整理のほかに、上述の『宋元学案』成書の第一段階の五人の言葉は、主に哲学と學術の弁論に関する内容である。

それに対して、史学者である全祖望の案語は特に學術源流や師伝關係や人物事件などの解釈と考証に重点を置いている。すなわち第二段階の主な編纂者である全祖望の言葉は主に史学と考証学の内容である。第三段階の編纂者である王梓材と馮雲濠は『宋元学案』の最後の校訂者として主に卷次の整理、材料の補充説明、正文の次序調整と校勘などの文献編集を行っている。前の表を見れば、王・馮二人の案語が一番多いとは言うものの、主に校勘と補充の文献整理に関する短い言葉であり、それに対して、黄氏父子と全祖望の言葉には長い段落がかなり多いのである。もちろん以上はただ各人の言葉の方面から論じたものである。実は黄氏父子の案語には、文献の考証と學術源流の説明も残されており、全祖望の案語にも思想の解釈に関する案語も少なくなく、王梓材・馮雲濠の案語に學術の考証がないわけではない。要するに、各編纂者は自分の専門の分野を主として、一致協力することによって初めて『宋元学案』という大著を完成したと言ふべきである。

現本の『宋元学案』の内容構成について具体的に言えば、卷首の「宋元儒学案序録」はもともと全祖望の作で一卷として全書の綱領とされるが、後に王梓材によって各学案の正文の前に分けて置かれると同時に、卷首にも保存される。次に正文は全一〇〇巻で、凡そ九一の学案、即ち八七の「学案」、二つの「学略」（「荊公新学略」、「蘇氏蜀学略」）、二つの学案（「元祐学案」、「慶元学案」）である。また、九つの学案が上下巻に分かれる。その中、五九の学案（全部六七巻）が黄宗羲によって成立し、全体の三分の二を占める。黄宗羲が亡くなった後、この五九の学案はすべて黄百家らの編纂を加えて、更に全祖望によって修訂・補訂された。そのほかの三三の学案（全部で三三巻）は全祖望によって成立し、その内容もすべて全氏によって編纂され、全体の凡そ三分の一を占める。さらに全祖望は全書の一〇〇巻の構成を決めた。また、王梓材と馮雲濠も一部分の内容（二つの学案など）を編纂した。それゆえに、黄宗羲と全祖望との二人は、『宋元学案』の成書における最も重要な編纂者だと言えよう。さらに細部にわたって言えば、各学案

の構成は一般的に、「学案表」によって各学案に収められている学者の師伝関係が示され、次に「序録」によって各案主の思想の特色やそれに対する評価などを述べて綱領としている。続いて案主の事績や学術活動などが記される小伝であり、次に案主に関する思想資料（文集・語録などから採取）が輯録される。次に「附録」（案主に関する事跡の補充と学術評論など）が置かれている。案主の後に、案主と関係がある人物を「講友」、「学侶」、「同調」、「門人」、「私淑」、「家学」など（その関係は巻首の「学案表」で示される）に分けて、同じようにその伝記や学術資料の輯録や付録や評論などが並べられている。このように、『宋元学案』には両宋代（金を含む）と元代のあらゆる儒学者とその流派の思想が論及されており、その思想の特色を明らかにし、さらに、学術の伝承及びその流派の影響が論述されている。また、宋・元二代の儒学思想を体系化し、基本材料・評価基準・思维方式をも提供したもので、『宋元学案』はこの領域の必須の参考書とすることができる。

筆者が作った『宋元学案』全文索引データ・ベースの統計によると、『宋元学案』には二四二八人の宋元時代の学者の伝記が立てられている。そして、『宋元学案』に収められている学者の数は『明儒学案』の二〇八人より一〇倍以上にも達しているのである。¹³その原因は明代思想史より宋元思想史の流派の方がより複雑多端であるということのほか、『宋元学案』は史学と「家系図」の意味が濃いので、特に全祖望の補充によって思想史とあまり関係のない、龐大な数の人物に至るまで取り入れている。実は『宋元学案』に伝記を除いて思想に関する言葉と文章がある学者はただ二七六人だけであり、全部の人数の一二%を占めるにすぎない。そのほかの人物は名前或いは短い小伝だけを挙げており、思想史料の文章はほとんどない。この二七六人は時間の幅も長く、北宋仁宗朝前後から清代道光年間に至るまで約八百年間のものである。その中に二〇九人は二四二八人の宋元学者に含まれており、『宋元学案』には彼らの思想資料が収められて全書の主体となる。そのほかの六七人は、例えば劉宗周（六二条の言葉がある）、高攀龍（七六条の言葉がある）ら、また編纂者をも含んで主に明清時代の著名な学者であり、『宋元学案』には彼らの多くの評論と解釈などの文章と言葉が残されている。また、以上の小伝或いは言葉のある人数を併せて重複を除くと、『宋元学案』の全文には凡そ二四九五人の学者の資料（伝記・文章・言葉など）が収められていることになる。

上述のように、『宋元学案』は複雑な成書過程を伴い、内容構成も複雑なため、その内容と研究にも様々な問題を生じることになった。したがって、これらに対する全面的な検討と考察が必要である。以下、先行研究を整理しながら、纂者の一人である黄百家を中心として取り上げ、その編集作業を検討することを通して、『宋元学案』の一部分の内容及びその学術価値を明らかにしたいと思う。なお、本稿では北京中華書局一九八六年版の『宋元学案』（全四冊、陳金生、梁運華点校）を底本とする。以下、『宋元学案』から引用する場合は、書名を省略して、巻数と学案名だけをあげる。

二 『宋元学案』における黄百家の案語

具体的な内容を検討する前に、まず簡単に『宋元学案』における黄百家の案語の分布と構成を見てみたい。次表は黄百家の案語が収められている学案名・案主名・人物名とその数目及びその順位の一覧である。なお、黄氏原本の学案名と巻次は、後の全祖望らの修訂によってすこし変わったが、その内容はほぼ保存されているから、本稿ではすべて百卷本の『宋元学案』の内容による。

次序	巻次	学案名	案主	人物	数目	順位
一	一	安定学案	胡瑗	胡瑗	二	一一
二				孫覿	一	一七
三				徐積	七	七
四				張巨	一	一七
五	二	泰山学案	孫復	孟宗儒	一	一七
六				孫復	二	一一
七				張洞	一	一七
八				祖無沢	一	一七

二九	二八	二七	二六	二五	二四	二三	二二	二一	二〇	一九	一八	一七	一六	一五	一四	一三	一二	一一	一〇	九
四二	三九				三四	三三	三一			二七	二五	二四	二三	一七、一八	一五、一六	一三、一四	一一、一二		九、一〇	三
五峰学案	豫章学案				武夷学案	周許諸儒学案	呂范諸儒学案			和靖学案	龜山学案	上蔡学案	榮陽学案	橫渠学案上、下	伊川学案上、下	明道学案上、下	濂溪学案上、下		百源学案上、下	高平学案
胡宏	羅從彥				胡安国	周行己・許景衡等	呂大忠・呂大鈞・呂大臨・范育等			尹焞	楊時	謝良佐	呂希哲	張載	程頤	程顥	周敦頤		邵雍	范仲淹
胡宏	朱松	羅從彥	羅博文	李侗	胡安国	周行己	蘇昞	呂大臨	呂大鈞	尹焞	楊時	謝良佐	呂希哲	張載	程頤	程顥	李初平	周敦頤	邵雍	范純仁
三	一	一	一	一	二	一	一	三	二	一	一	一	一	四九	二六	一九	一	二四	一五	一
九	一七	一七	一七	一七	一一	一七	一七	九	一一	一七	一七	一七	一七	一	二	四	一七	三	五	一七

三〇	四八、四九	晦翁学案上、下	朱熹	九	六
三一	五〇	南軒学案	張栻	一	一七
三二	五二	艮齋学案	薛季宣	一	一七
三三	五四	水心学案上	葉適	二	一一
三四	五六	龍川学案	陳亮	一	一七
三五	五七	梭山復齋学案	陸九韶	二	一一
三六	五八	象山学案	陸九淵	一	一七
三七	六三	勉齋学案	黃榦	一	一七
三八	六四	潛庵学案	輔宏	一	一七
三九	六九	滄洲諸儒学案上	李燔・張洽・廖德明等	一	一七
四〇	七五	絜齋学案	袁燮	一	一七
四一	八〇	鶴山学案	魏了翁	一	一七
四二	八一	西山真氏学案	真德秀	一	一七
四三	八二	北山四先生学案	何基・王柏・金履祥・許謙	一	一七
四四					
四五				一	一七
四六				一	一七
四七				一	一七
四八				一	一七
四九	八三	双峰学案	饒魯	一	一七
五〇	八五	深寧学案	王忞麟	一	一七

五一	八六	東發学案	黃震	黃震	一	一七
五二	八七	靜清学案	史蒙卿	程端礼	一	一七
五三				史蒙卿	一	一七
五四	八九	介軒学案	董夢程	胡炳文	一	一七
五五	九〇	魯齋学案	許衡	趙復	一	一七
五六	九一	靜修学案	劉因	劉因	一	一七
五七	九二	草廬学案	吳澄	吳澄	五	八
合計	四五	三九		五七	二二三	

分布の特徴から言えば、その案語がもつとも多い五人は、一位の張載が四九条で総数の二三%を占め、二位の程頤が二六条で総数の一二%を占め、三位の周敦頤が二四条で総数の一一%を占め、四位の程頤が一九条で総数の九%を占め、五位の邵雍が一五条で総数の七%を占める。五人の案語は全部で一三三条、総数の六二%を占める。この五人は所謂理学の創始者である「北宋五子」として、黄百家の最も注目した学者たちであると言えよう。その理由は五人のオリジナルな学術思想のほかに、黄百家自身の学術思想にも関係がある。例えば、前に説明したように黄百家は家学を受けて天文曆法が得意であったので、張載の四九条の案語において黄百家は、『正蒙』における天文と性理学説を詳しく論述した。また、邵雍の象数易学について黄宗羲『易学象数論』、黄宗炎『易学弁惑』には専門の論著があり、黄百家はこれを取り入れて更に自分自身の意見をも加えた。周敦頤、程頤、程頤の三人についても、処々に劉宗周、黄宗羲らの意見を引いて、主にその師承関係や性理学や学術対比などの方面から論述をしている。つまり、以上は主に家学（清代浙東学派）の影響を受けていたと言う一方で、黄百家にとってこの五人からの啓発は最も多かったであろう。

現行百卷本『宋元学案』の中に黄氏原本から出た五九の学案は、すべて黄氏父子らによって編纂が加えられたが、黄氏稿本はすでになくなつたので、具体的にどの部分が黄百家によって編纂されたのかは判断しにくい。しかし、表

に示すように、黄百家は三九の学案に収められた五七人の資料の中に二二三カ条の案語（或いは文章）を残している。⁽¹⁴⁾これらの案語は直接に黄氏の作業を記しているので、もちろん最も信頼できる立論の根拠であろう。以下、文献の整理の方面から黄百家の案語の具体的内容を検討したい。

三 黄百家の文献整理と資料考証

『宋元学案』には膨大な量の学者とその資料が収められており、その上、それに対する考証もよくなされているので、その文献と史料の価値は非常に高いと言える。それに対する研究もよくなされている。例えば、張林川・林久貴「略論『宋元学案』の体例特徴と文献価値」⁽¹⁵⁾では、『宋元学案』と『宋史』とを比較してその史料的价值を検討している。また、盧鍾鋒「論『宋元学案』の編纂・体例特徴と歴史地位」⁽¹⁶⁾及び『中国伝統學術史』第十一章「清初總結性學術史的集大成之作」⁽¹⁷⁾、倉修良・呂建楚「全祖望和『宋元学案』」⁽¹⁸⁾、侯外廬、邱漢生、張豈之等編『宋明理學史』下卷第二十七章「『宋元学案』及其對宋元時期理學的總結」⁽¹⁹⁾、陳其泰「『宋元学案』的編撰與成就」⁽²⁰⁾、王永健「全祖望評伝」第五章「全祖望与『宋元学案』」⁽²¹⁾、陳祖武「『宋元学案』纂修拾遺」及び『中国學案史』第七章「『宋元学案』的纂修」などの著作と論文があるが、しかし、ほとんど百卷本の全祖望補本をめぐって、主に全祖望及び黄宗羲の編集作業について検討している。それに対して、黄氏原本における重要な編纂者である黄百家の編集と考証などの重要な作業についてはあまり詳しく検討していない。実は、黄百家は學術と思想の検討のほかに、文献の整理と資料の校訂などの方面においても重要な役割を果たした。以下、三つの方面から分析したい。

(一) 文献の整理と校訂

黄百家は黄宗羲が『明儒学案』の凡例で「是の編、皆全集従り纂要鉤玄し、未だ嘗て前人の旧本を襲はざるなり。」⁽²⁴⁾と

言っているように、謹厳な学術態度を受け継いで、『性理大全書』などの二次資料ではなく、直接に各学者の全集などの原始資料と方志、年譜などの関係書物から精華を取り入れ、さらに様々な考証の作業をした。しかし、宋元時代の学者に関する文集と著作などは膨大な量が残されていたので、その編纂はたいへんな作業になった。具体的な例で言えば、巻七十五「絜斎学案」において、袁燮の附録の下に黄百家は次のように述べている。

百家謹んで案ずるに、真西山言ふ、「絜斎の葬、慈湖之を銘し、其の大節、摹写すること尽くせり。」と。之を慈湖の遺書に考ふるに、有る無きなり。即ち『舒広平墓誌』亦た慈湖の作る所にして、『広平言行録』に之を載するも、遺書亦た闕く。古来の文集既に伝へざるもの多く、伝ふる者も又復全からざること此くの如し。嘆ずべけんや。⁽²⁵⁾

真徳秀の言葉は、四部叢刊景明正徳刊本『西山先生真文忠公文集』巻第四十七「顕謨閣学士致仕贈龍図閣学士開府袁公行状」にあるが、黄百家は『西山文集』のこの文章を見て、真氏の言葉を端緒として楊簡（慈湖）の文集に袁燮の墓誌銘を探そうとしたが、見つからなかった。実はこの文章は、即ち『袁正献従祀録』に載せている「故龍図閣学士袁公墓誌銘」であり、黄百家はこれを見なかった。後に『慈湖先生遺書補編』（民国『四明叢書』所収）は、『袁正献従祀録』によって取り入れて補充している。同じように、黄百家は『広平言行録』から楊簡が作った「舒広平墓誌」を発見したが、楊簡の文集にも見えなかった。両者はみな文集に未収録のため、ほかの資料に載せている墓誌銘である。ここから、黄百家が『宋元学案』編纂過程中に幅広く文献を探し、各人の著作と文集はもちろん、その他、さまざまな関連の資料をも探したことがよくわかる。

さらに輯録資料に対する取捨選択と排列順序の決定は、もちろん黄百家自身の編纂原則と学術思想に基づいている。その中で最も注意すべきことは、周敦頤のために立てた「濂溪学案」の中の「太極図説」及び「太極図」と『通書』の排列次序であろう。周敦頤の著作というと、一般的に「太極図」とその解説の「太極図説」がその哲学の綱領として最も重視され、編纂者はだいたいこれを『通書』の前に置くのが通例であるといえよう。しかし、黄百家は「濂溪学案」を編纂した際にその逆にした。その理由は黄百家が叔父黄宗炎の『太極図弁』の観点を受けて「太極図」と

「太極図説」がもともと仏道から出て改造されたものとして、その内容は純粹でなく、儒仏道が混在しており、『通書』の「粹白無瑕」に匹敵できないとしたからである。黄百家の意見が正しいかどうかはともかく、このような編纂作法は現代にも賛成者がいる。例えば、牟宗三と蔡仁厚は、周敦頤の哲学に対する解釈については『通書』の思想を綱領として「太極図説」の義理を規定すべきで、その逆ではない、と主張した。故に彼らは『宋元学案』の排列次序に賛成し、その著作においても『通書』を「太極図説」の前に論述した。⁽²⁸⁾ただ、牟、蔡両氏は主に哲学解釈における主従の関係から判断しているが、黄百家は主に内容の考証と価値の判断から論じている。

書物を探す過程に、それに対する書誌学的考証、例えば版本の選択や目録の記載なども重要な作業である。『宋元学案』の編纂者の中で、王梓材と馮雲濠の二人はこの方面の案語が一番多いが、ほかの編纂者もこれらの作業を残している。例えば、卷五十四「水心学案」上において葉適（一一五〇～一二二三）晩年の力作『水心習学記言』から多くの条目を輯録した後に、黄百家はその版本と卷目について次のように述べている。

百家謹んで案するに、『習学記言』の今に存する者は、『序目』のみ。内に経を説くもの共に十四卷、『易』四卷、『書』一卷、『詩』一卷、『周礼』、『儀礼』合わせて一卷、『礼記』一卷、『春秋』一卷、『左氏伝』二卷、『国語』一卷、『孟子』一卷あり。『記言』の原本の若きは若干卷を知らず。惜しいかな見るを得ざること。是の書の前に、山陰孫之弘の序有り、葉氏の門人なり。（梓材案するに、此の條、朱氏の『経義考』自り録す。蓋し『学案』の原本に係りて、竹垞之を録する者なり。竹垞嘗て吾が郡の二老閣に寓し、鄭南溪と與に後二老と稱せられる。故に『学案』の原稿を見るを得たり。又案するに、是の書凡そ経十四卷、諸子七卷、史二十五卷、『文鑑』四卷、合わせて五十卷と為し、『習学記言序目』と名づく。別に全書有るには非ざるなり。）⁽²⁹⁾

歴代書目の記載から考察すれば、宋陳振孫（一一八三？～一二六三？）『直齋書録解題』卷十では最初にこの書を記録し、その後、宋末元初馬端臨『文獻通考』『経籍考』卷四一、元脱脱『宋史』卷二百五「芸文志」第一百五十八、明焦竑『国史経籍志』卷四子類、明湯日昭『（万曆）温州府志』卷十七などではみな『習学記言』という書名で記録されている。ここで注意すべきは、明代までの記録はみな『習学記言』という書名である。しかし、黄百家は上述の

案語でその書名は実に『習学記言序目』であると最初に指摘した。その疑いの依拠する所は葉適の弟子の孫之弘の序文であり、次のように言っている。「曰く、『習学記言序目』とは、龍泉葉先生の述ぶる所なり。初め先生、經史百氏の條目を輯録して『習学記言』と名づく。未だ論述すること有らず。金陵自り歸りて、群書を研玩し、十六寒暑を更て、すなわち『序目』五十卷を成す。」³⁰孫之弘のこの序文によれば、この書の成書は前後二段階で、すなわち先に『習学記言』という単なる群書の言葉を集めた書物があり、後に自分の論述を加えて作った『習学記言序目』という新しい書物になったようである。ここから見れば、黄氏原本の一部分の案語は後の編纂者によって削除されたが、幸いに朱彝尊（一六二九～一七〇九）は黄氏原本を見て、この一條と孫之弘の序文をその『經義考』卷二百四十三群經に載せ、その意見を受けて『習学記言序目』と題しており、後に王梓材が『經義考』から『宋元学案』に取り入れたことがわかる。『經義考』の後、また数家の私家書目は『習学記言序目』と題名している。例えば、清丁丙（一八三二～一八九九）『善本書室藏書志』卷十八、清陸心源（一八三四～一八九四）『皕宋樓藏書志』卷五十五子部、清孫詒讓（一八四八～一九〇八）『温州經籍志』卷十七子部、清王昶（一八二八～一八九九）『光緒』永嘉縣志』卷二十七芸文志四などの目録には、『習学記言序目』五十卷の鈔本（写本）として記録されており、また、すべて孫之弘の序文を輯録しているから、その依拠する所は『經義考』の記載と孫之弘の言葉であろう。

ここからわかるように、『習学記言序目』の成書には二段階があるが、黄百家以前の書目ではこの書はもともと『習学記言』と称しており、朱彝尊の後に私人藏書家がこの本を記録する際に『習学記言序目』という書名に変えたのである。だから、王梓材が言ったように、二つはただ書名が違っただけで実はその内容は同じである。ただ「序目」という意味は一般的に書の目次、或いは序文と目録である。書名としてあまり適当ではないと言えよう。したがって、明代以前の書目にはみな『習学記言』と称されたのであろう。後の官修の『四庫全書』及び『四庫全書総目提要』にもそのようなにある。しかし、一九七七年の北京中華書局版本は黄百家の案語と孫之弘の序文などによって再び『習学記言序目』と題した³²。それに対しては議論もある。張岱年は孫之弘「序」の説は信頼することができないとし、この書は序目（目録）だけでなく、その書名は『習学記言序目』ではないと主張した³³。それに対して、北京中華書局本

『宋元学案』の点校者の一人である陳金生は、『習学記言序目』巻四六の記載によって、この書名は孫之弘の杜撰ではなくて葉適自身の命名であると指摘して、更に目錄学史の角度から「序目」（序録と目錄両方）と「目錄」（書名・篇名だけ）との違いを述べて、『習学記言序目』の成書の二段階から見れば、『習学記言』はもともと群書の言葉の編集だけで、まだ自分の意見を加えていなかった、としている。『習学記言序目』は『習学記言』を本として更に自分自身の読書心得と評論を集めたものである。だから、今の『習学記言序目』には輯録資料が少なく、ほとんどが葉適自身の評論であり、その内容は劉向以来の序録と後世の『四庫提要』などの「提要」と似ている。だから、『序目』という書名はその成書の過程を伴った内容に合致していて間違いないはずである、と主張した。⁽³⁴⁾ 陳金生の考証はかなりの説得力があると言わなければならない。⁽³⁵⁾ そうは言うものの、『習学記言序目』の「序目」の表現は読者に対する誤解の恐れがあると見える。従って、今日までこの著作名は『習学記言』と『習学記言序目』との両者が用いられている。いずれにしても、黄百家が最初に孫之弘の序文を指摘したことによって、この書の成書状況と内容構成などを理解するために有益なものとなった。その後、朱彝尊らはその影響を受けて『習学記言序目』という書名を記録したが、その過程において黄百家のこの案語が重要な役割を果たしたと言わなければならない。

さらに、書誌学的観点だけでなく、黄百家は輯録資料の具体的内容にも校訂を施した。例えば、巻十七「横渠学案」上で、以下の張載『正蒙』樂器篇の一條を取り入れた。「苟造の徳降れば、則ち民誠和にして鳳致すべし。故に鳴鳥聞くは、和氣の応と為す所以なり。」⁽³⁶⁾ という文章の案語で、黄氏は次のように述べている。

百家謹んで案するに、苟は当に着に作るべし。『書』の君奭に、「着造の徳降らず、我は則ち鳴鳥聞かず。」と。言ふところは着老成人の徳、下、民に及ぶなり、則ち鳴鳥聲有り。此れ周公、召公を留むるの意なり。⁽³⁷⁾

今の『四庫全書』本『張子全書』巻三『正蒙』と『正誼堂全書』本『張橫渠先生文集』巻四『正蒙』「樂器篇」などの版本にはみな「苟」の字で書いているが、元代董鼎『書伝輯録纂注』巻五の注釈に『正蒙』の言葉を引用して「着」と書いた。董鼎は恐らく『尚書』の正文によって直接『正蒙』を直したのである。即ち『正蒙』の文字はもともと「苟」と書いていたようである。それにしても、黄百家が『正蒙』を編入した時に明白に指摘したことは、そ

の校訂作業と言ふべきである。今の北京中華書局点校本『張載集』もこのように『尚書』によつて「苟」を「蒿」に改めている。⁽³⁸⁾

そのほか、黄百家はところどころで、取り入れた著作の成書背景を紹介して読者の便に供した。例えば、卷十三「明道学案」上に、黄氏は程顥の「定性書」を取り入れて、その題目の下に『二程文集』卷三「明道文集」三「答横渠先生定性書」によつてこう述べている。「百家謹んで案ずるに、横渠張子、先生に問ひて曰く、「性を定むるに未だ動かざる能はずして、猶ほ外物に累はさるるは、何如。」と。先生因りて是の篇を作る。」⁽³⁹⁾と。また、卷四十八「晦翁学案」上において、朱子の「中和説」の下に、『晦庵先生朱文公文集』卷第七十五所収「中和旧説序」によつて、その中和思想発展の背景を説明した。これも一つの好例である。⁽⁴⁰⁾

(二) 事績と史実の考証

前述のように、『宋元学案』には二四二八人の学者の伝記があり、また、附録の中にもその人の事績と関連史実がよく見える。もちろんその中の歴史記事と人物事績に関しては、様々な問題がある。それに対して編纂者は様々な考証作業を残している。特に『宋元学案』正文の前の王梓材の「校刊宋元学案條例」⁽⁴¹⁾によると、全祖望はその時『宋史』を修訂する意図をも持っていたので、『宋元学案』を編纂する際に特に伝記をめぐつて事績と史実の考証に務めた。特に全氏は乾隆元年（一七三六）進士に合格して庶常館に入り、その職務の便によつて永樂大典などの貴重な資料を写しとつて、さらにそれに基づいて多くの考証の文章（碑伝、序跋文など）を撰した。『宋元学案』の中に九二条の「謝山」を初めとする文章がこれである。例えば、卷四「廬陵学案」「謝山『公是先生文鈔序』」、卷五十八「象山学案」「謝山『淳熙四先生祠堂碑文』」など、これらの考証文章はもともと全氏の文集『鮚埼亭集』三八卷及び『外編』五八卷にあり、後に王梓材によつてその文集の『宋元学案』に収められている人物と関係がある文章は『宋元学案』に取り入れた。故に、『宋元学案』の略伝とその考証は『明儒学案』の略伝と比べると数がずっと多いほかに、史伝の意

味も濃いのであり、『宋史』の不足と誤り（伝記の欠落、或いは記載の相違など）をも補訂することができるために史料価値がかなり高いのである。以上のように、『宋元学案』の主な編纂者である全祖望はこの方面の考証に特に力を注いだが、黄百家もこれらの作業を行った。多くの学者の小伝を作るほかに、人物の生涯に対する考証と言えば、卷三十九「豫章学案」の附録において、黄百家は羅從彦が楊時と程頤に師事した年代についてこう述べている。

百家謹んで案するに、『豫章年譜』に謂ふ、政和二年壬辰、先生四十一歳、龜山、蕭山令と為り、先生始めて從ひて学を受く、と。『宋史』に亦た云ふ、龜山、蕭山令と為りし時に、先生徒步にて往きて学ぶ。龜山、之を熟察し、喜んで曰く、「惟だ從彦のみ與に道を言るべし」と。弟子千餘人、先生に及ぶ者無し、と。謹んで『龜山全集』を考ふるに、丁亥、餘杭に知たり、壬辰、蕭山に知たり、相ひ去ること六年なり。而して「餘杭所聞」に已に豫章の間答有れば、則ち其の從学、蕭山に始まるに非ざること明らかなり。豫章の伊川に見ゆるは、龜山に見ゆるの後に在り。伊川は丁亥に卒す。若し龜山に見ゆること壬辰に始まれば、則ち伊川の卒して已に六年なり。又何ぞ從ひて之に見えんや。先君子、別に『豫章年譜訂正』有り。⁴⁴

羅從彦は宋神宗熙寧五年（一〇七二）に生まれ、宋高宗紹興五年（一一三五）に没し、享年六十四歳である。政和は北宋の徽宗の年号（一一一一～一一一八）で、政和二年壬辰は一一二二年であり、丁亥は一一〇七年であり、ちょうど六年の差がある。程頤は、宋仁宗明道二年（一〇三三）に生まれ、宋徽宗建中靖国元年（一一〇七）に没し、享年七十五歳である。もし羅從彦が政和二年壬辰（一一二二）に初めて楊時に師事して、後に程頤を尋ねたのであれば、すなわち程頤はすでに六年前に没しているので、師事することはできないのである。すなわち『豫章年譜』と『宋史』「羅從彦伝」の記載によると、羅從彦の楊時と程頤との二人に対する師事時期が互いに矛盾している。その上、今の『龜山集』卷一二語録三「餘杭所聞」にはすでに幾つかの「仲素問」という羅從彦（字は仲素）と楊時との問答があるので、その師事時期は楊時が丁亥（一一〇七）餘杭に知府となる前からであることは明白である。この二つの証拠は非常に説得力があると言わべきである。したがって、その後、清の李清馥『閩中理学淵源考』卷四「文質羅豫章先生從彦学派」では、黄百家の考証を認めてこう述べている。

謹んで案するに、豫章先生の本伝、『宋史』に詳らかなり。独り其れ政和二年壬辰、学を龜山に蕭山に受く、年四十一なり、と載す、後の斯の伝を纂録する者、考証すること未だ合せざる有るが似し。茲に此の伝を輯むるは、邵氏『宏簡録』、毛氏『豫章事実年譜』、黄氏『宋儒学案』、並びに『龜山集』、『豫章集』、朱子『經義考』の諸書従り輯録して重訂す。『学案』に云ふ、考ふるに、龜山、丁亥餘杭に知たり、壬辰蕭山に知たり、相ひ去ること六年なり。(中略)又何ぞ従ひて之に見えんや、と。以上の考弁する所は殊に據るに足ること有り。⁽⁴⁵⁾

だが、黄百家が述べている父黄宗羲の『豫章年譜訂正』は、最近の浙江古籍出版社二〇〇二年増訂本『黄宗羲全集』にも見えない。従つて、黄百家のこの案語は極めて重要だと言えよう。その上、卷三十九「豫章学案」の羅從彦の小伝に、「崇寧の初め、龜山を將樂に見ゆ。」との一句があり、即ち羅從彦が楊時に師事したのは崇寧(宋徽宗趙佶の年号、一一〇二—一一一〇)の始めであると指摘しているが、その理由については示していない。⁽⁴⁶⁾ただ、その下にすぐに黄宗羲の案語があり、また、この小伝の後に全祖望補本の「修」、「補」の字がないから、黄氏原本にあったということがわかる。故にこの小伝は黄宗羲自身が撰した『豫章年譜訂正』の結論が反映されたものである。中華書局点校本『宋元学案』の点校者は、この句の下に注釈で黄氏父子の考証を認め、さらに、『宋史』の羅從彦本伝には史実と合わないところが多いと指摘している。⁽⁴⁸⁾実は『宋元学案』にはこのように史料的价值のある考証が非常に多い。⁽⁴⁹⁾これは『宋元学案』のひとつの長所と言えよう。

そのほか、黄百家の案語には歴史上の事件に対する考証もある。例えば、卷三十四「武夷学案」に収められた「文定胡武夷先生安国」の附録の後に朱子の言葉を用いて次のように述べている。

文定と秦檜との厚善の故を問う。朱子曰く、「秦嘗て密の教と為る。翟公巽、密州に知たり、薦めて宏詞を試みる。游定夫、密を過り、之と共に翟に飯し、之を奇とす。後に康侯、才を定夫に問ふ。首に秦を以て対へと為し、其の人、荀文若に類すと云ふ。又事として会せざる無しと云ふ。京城破られ、金、張邦昌を立てんと欲す。執政より下、敢えて異議有る無し。惟だ秦、抗論して以て不可と為す。康侯益々之を義とし、力めて張德遠諸公の前に言ふ。後に秦、北自り帰り、與りて国政を聞く。康侯屬望すること尤も切にして、嘗て書疏の往還する有りて、

国政を講論す。康侯、詞掖講筵の召有るは、秦之を薦むればなり。然れども其の雅意堅く、就かんと欲せず。是の時、已に其の隱微の一二、難き處有るを窺ひ見る。故に老病を以て辞す。後來、秦、大疏脱を做し出すに至りては、則ち康侯已に世を謝せり。」と。⁸⁰

朱子の言葉は胡安国（一〇七四〜一一三八、字は康侯、諡号は文定）と秦檜（一〇九〇〜一一五五）とのつながりの経緯をよく示しているが、その「京城破られ、金、張邦昌を立てんと欲す。執政より下、敢えて異議有る無し。惟だ秦抗論して以て不可と為す。」と言うように、靖康末における「秦檜の議状」は、その宋室を防衛する「抗金衛土」の高名を得た「功績」として元脱『宋史』卷四百七十三列伝第二百三十二「姦臣三秦檜」にも載せられている。また、この事件は胡安国らが秦檜を信任した一つの重要な原因でもある。しかし、黄百家は朱子の言葉の下にこの事件について次のように述べている。

百家謹んで案ずるに、靖康に金、邦昌を立てんと議す。馬時中、抗言を稠人に伸べて曰く、「吾が曹、職に争臣と為る。豈に緘黙坐視すべけんや。当に共に議状を入れ、趙氏を存せんことを乞ふ。」と。秦檜答へず。時中即ち自ら稿を屬し、就ち臺吏を呼びて名を連ねて之に書す。檜既に臺長と為れば、則ち当に首に列すべし。以て檜に呈す。檜、猶豫す。時中、同僚を帥いて辞を合せて力めて請ふ。檜已むを得ずして名を書す。是れ檜、馬時中に迫られ、臺長を以て名を列す。何ぞ嘗て抗論せん。すなわち知る、当時、賢愚を論ずる無く、盡く檜に欺かるるを。幸ひにして文定、宦情、寄するが如し。天下後世之を亮とす。因りて人を知るの難きを歎するなり。⁸¹

ここから見れば、「秦檜の議状」とは、彼が同僚に責め立てられてやむを得ず署名したことがわかる。この事件の真相及び胡安国らが秦檜のために騙されて彼に交わった原因はもつと明らかであろう。黄百家の史料の来源を調べると、実はこの事件については南宋からすでに異なつた記載があつた。例えば、宋王明清（一一六三〜一二三四）『揮塵錄』揮塵餘話卷之二、宋李心伝（一一六七〜一二四〇）『建炎以来系年要録』卷二、宋李幼武『宋名臣言行録外集』卷九などの書にはみな黄百家が述べていることが載っている。また、明陳絳『金壘子』上篇卷十九、黄百家の後の清俞樾（一八二七〜一九〇七）『茶香室三鈔』卷八「秦檜靖康末議状不足信」にも、王明清らの記載によつて『宋史』

の記載を反駁し、さらに『宋史』は後の元代（異民族の政權）の官修史書として、秦檜をえこひいきしていることが免れなかったと指摘している。

朱子はまた秦檜の議状に関する王明清らの記載に言及していなかったが、黄百家と同じように明安国の子である胡寅（明仲）・胡寧（和仲）・胡宏（仁仲）兄弟の節操を認めた。⁵²黄百家は更に『揮塵錄』などの史料によつて、この事の経緯を補充して以上のように述べている。『揮塵錄』などの記載は確かに史実であるかどうかはともかく、重要な参照史料であることは疑いないと言えよう。ただ、最新の研究者は胡氏父子と秦檜との関係についていくつかの研究があるが、しかしほとんど上述の朱子言葉を引用しただけで、黄百家の言及び『揮塵錄』などの史書にはあまり注意を払っていないようである。⁵³

（三）師伝関係の考証

『宋元学案』と『明儒学案』は中国学案史上の双壁と言うべきである。ただ、両者は同じ体裁の著作に属される一方で、いくつかの違いもある。『宋元学案』は、『明儒学案』が各人の思想的問題や学問の宗旨を重んじたのに対して、各人の史実や考証を重んじたものとなっており、思想分析よりは資料収集的な側面が強い。これは『明儒学案』を独力で完成させた黄宗羲と、『宋元学案』の実質的な編纂者である全祖望との学問傾向の相違によるものとも言われている。ただ『明儒学案』以上に学脈の探索に熱心で、各学案的冒頭には「学案表」⁵⁴と正文と合わせて見ると、『宋元学案』に収められた二四二八人の宋元時代の学者の間には、「講友」、「学侶」、「同調」、「門人」、「私淑」、「家学」、「続伝」、「所出」、「所伝」、「之先」、「再伝」、「別派」、「別伝」、「餘派」などの関係があり、非常に複雑多端でありながら、一つの龐大な人脈によるコネクションになっている。実は師伝関係は『宋元学案』全体を貫いている一つの手がかりとも言えるべきであり、『宋元学案』における宋元儒学思想史の脈絡の研究にも重要な価値を持っていると言えよう。⁵⁵しかし、二

人の学者の間に具体的にどのような関係があるかは判断し難い場合もある一方で、師伝関係が学者の思想の形成に対してどのような役割を果たしたかといった様々な問題も生まれた。これらの考証については全祖望と王梓材が最も多いが、黄百家もまたこのような作業を残している。その言葉には注意すべき点も少なくない。

例えば、朱子は周敦頤と二程子との師伝関係を主張し、周敦頤が道学の創立者である地位を認めたが、当時すでに汪応辰らと議論が起こった。その後、周程授受関係は千年にわたる難問になり、今までも様々な議論がありながら、定説がないようである。例えば、土田健次郎は『道学の形成』第二章第二節「周程授受再考」の中で、朱子の所謂二程と周敦頤との授受関係を否定して、朱子の「周敦頤神話」を打破することを主旨として、周敦頤ではなくて程伊川が道学その学派の実質的創立者だという説を樹立した。⁽⁵⁶⁾ 鄧広銘も「關於周敦頤的師承和伝授」の中で、史実の考証から周程授受の見解を徹底的に否定した。⁽⁵⁷⁾ 黄百家は、卷一「安定学案」の案語で、「先生太学に在り、嘗て「顔子所好何学論」を以て諸生を試す。先生、伊川の作を得て、大いに之を奇とし、即ち相ひ見んことを請ひ、處すに学職を以てし、知契独り深し。伊川の先生を敬礼すること亦至れり。濂溪に於いては、嘗て従つて学ぶと雖も、往往にして之を字して「茂叔」と曰ふ。先生に於いては、「安定先生」に非ずんば稱せざるなり。」⁽⁵⁸⁾ と言うように、程頤が周敦頤より胡瑗の方を尊重していたことを指摘したが、その「嘗て従学」したことを認めた。一方で、黄百家は「周茂叔に学を受くるの言に至りては、親ら明道の口より出で、豈に「仲尼」の二字を以て子思の宜聖の孫と爲すを疑はんや。」⁽⁵⁹⁾ と言うように、称号だけで判断できないと主張した。また、卷三十九「豫章学案」の案語に、「程太中能く周子を知りて二子をして之に事はしむ。二程の学、遂に濂溪由りて孟氏を繼ぐ。」⁽⁶⁰⁾ と言うように、二程子が周敦頤の伝承によって道統を継いだことを認めた。後の編纂者である全祖望はその意見を受け継いでさらに詳しく弁論した。⁽⁶¹⁾ その要点を言えば、二程子と周敦頤の師事関係を認めた一方で、二程子の思想は周敦頤から受け継いだもの（「伊尹の志に志し、顔子の学を学ぶ。」⁽⁶²⁾ など）が極めて少なく、その思想の大本は自得、或いは張載らの学者から出たことを指摘した。故に今の『宋元学案』では程頤を胡瑗と周敦頤二人の弟子に列している。要するに、黄百家らの主な観点は、客観的な師伝関係を認める一方で、それをもつて学者の思想形成における役割を誇張することはできないということである。

また、卷十二「濂溪学案」下に収められた李初平の伝記の下で黄百家はこう述べている。

百家謹んで案するに、先生、元公の上官と為る。当に弟子に列すべからずと謂ふ者有り。夫れ学は道を伝ふるを以て事と為す。豈に勢位を論ぜんや。古自り今に至るまで、弟子有るも道を伝ふる能はざるは多し。先生の懷を虚しくして業を問ひ、心を悉くして聴受し、二年にして得る有り、二程と共に諸弟子の班に列するを以てすれば、先生の盛徳を見るに足る。又何ぞ嫌はんや。又何ぞ嫌はんや。(梓材案するに、主一の是の説亦た理有り。顧て謝山、稿底「濂溪門人」に於いて李先生の名を抹去す。是れ仍ほ講友に列して弟子に列せざるなり。)⁸³

ここからわかるように、黄氏原本では黄百家は、周敦頤の上司である李初平を周氏の弟子に列した。黄氏は韓愈「師説」のように師道の不伝を感嘆して特にそうさせ、李初平の「不恥下問」の好学精神を表彰しようとしたが、すこし感情的になったので、後に全祖望は李初平を周敦頤の「講友」(学問の友達、特に社会地位のより高いもの)に列したのである。全氏の立場はより客観的であると言えよう。しかし、黄氏の学術態度には注意すべきものがある。卷六十四「潜庵学案」に輔広の附録の後で黄百家は黄宗羲の言葉を引用して同じような傾向の意見を引用してこう言った。

百家謹んで案するに、輔潜庵は一儒生なるのみ。漕試に四たび学して第せず。陳秋塘、之に詩を送りて云ふ、「聞説するに平生輔漢卿、武夷山下に殘羹を啜る。」と。其の哀颯、一に此に至るなり。而るに伝ふる所の学は、蜀に則ち魏鶴山了翁有り、閩に則ち熊勿軒禾、陳石堂普有り、吾が東浙に韓侂齋翼甫自り子莊節性に伝へ、余端臣再び伝へて黄文潔震有り、有明に至るに逮ぶも、其の学を伝ふる者絶えず。此れ先遺献の云ふ、「道の行はると行はれざると、豈に時と位とを以てせんや。何ぞ先生の牢落して遠き自り耀くこと有らんや。」と。⁸⁴

ここからわかるように、黄氏父子は学問を優先して社会地位を後にするという純粋な学術態度を持っている。その理由は學術の伝承は地位によつては決めることができないからである。これは黄氏父子の一貫した思想史観と言うべきである。ここから見れば、上述の二程子及び李初平と周敦頤との師伝関係に対する処理は偶然ではないと言えよう。その主な問題点は、歴史考証学の立場は生前の地位や事績などに着目し、思想史の立場は死後の思想の影響などを特に重んじるが、事績と思想は不一致のところがあるから、史学と思想の研究においては違いが生じた。故に輔広と同

じように、周敦頤は生前においては社会的、学術的地位はあまり高くなかったのに、後世に対して影響が極めて大きく地位も高くなり、生前と死後の違いは非常に大きいので、その師伝関係と学術地位について様々な議論が生じたのであろう。

そのほか、黄百家は前代典籍に載っている師伝関係に関する記載に対して具体的な考証もしている。例えば、卷八「鶴山学案」の魏了翁の小伝の下でこう述べている。

百家謹んで案するに、『宋史』に言ふ、鶴山、「室を白鶴山の下に築き、輔広、李燔より聞く所の者を以て門を開きて徒に授く。士争ひて笈を負ひて之に従ふ。是れ由り蜀人尽く義理の学を知る」と。是に於いて『嘉興志輔漢卿伝』、遂に鶴山は是れ漢卿の門人と謂ふ。然れども『鶴山集』を考ふるに言ふ、「開禧中に、余始めて漢卿を都城に識る。漢卿、朱文公に従ふこと最も久しく、盡く公の平生の言語文字を得。毎に余を過りて、相ひ與に熟復誦味すれば、輒ち晷移るも去らず。余既に外に補ふ。漢卿悉く挙げて以て相ひ畀ふ。」と。又言ふ、「亡友輔漢卿、端方にして沈碩、文公の深く許與する所なり。」と。すなわち友にして師に非ざるを知るなり。（梓材案するに、『二江諸儒学案』「范双流先生子長伝」に云ふ、「鶴山の初めて学に志するや、先生兄弟及び薛符溪に由りて以て門戸を得、中原に入るに及びて、始めて李敬子、輔潜庵を友とす。」と。案するに、双流の弟は、名は子諲。薛は、名は紱。⁶⁶）

『宋史』卷四百三十七列伝第一百九十六「魏了翁伝」、『嘉興志輔漢卿伝』などにはいずれも魏了翁を輔広、李燔の弟子としたが、黄百家は魏了翁『鶴山集』卷五十三「朱文公語類序」の記載によつて「講友」の関係を判断した。これは魏了翁自身の言葉によるものであるから、もちろん最も信頼できると言えよう。実は卷六十四「潜庵学案」の輔広の小伝の後に、黄宗羲はすでに輔広と魏了翁の「講友」関係に対して考証を行つて⁶⁶いる。黄百家はそれを受けてさらにこの魏了翁の伝記に記載して対照させたのであろう。その後、王梓材は黄氏父子の考証に従つて、さらに全祖望補本の「二江諸儒学案」（今の『宋元学案』卷七十二「二江諸儒学案」）の知州范双流先生子長の伝記⁶⁷によつて、魏了翁が范氏の伝承及び輔広、李燔の講友の関係を決めて学案表に載せ、その伝承関係を定めたが、その過程において黄

氏父子の考証が重要な役割を果たしたと言わなければならない。

おわりに

本稿はまず『宋元学案』の成書過程と編纂者の分業と内容の構成、特に黄百家の案語の分布と特徴に対して概括的に説明して全体の分析の基礎とした。次に『宋元学案』の主な編纂者である黄百家の案語をめぐってその編纂作業に関する内容を分析して、それによって『宋元学案』の学術思想価値の一斑をも明らかにした。全体から見ると黄百家は黄宗羲の学術思想の忠実な継承者としてその編纂原則と学術史観を受け継いで『宋元学案』を編纂するために、原資料から材料を選択・整理し、更に事績と史実及び師伝関係に対して様々な考証作業をも施した。その案語には注意すべき点も少なくない一方で、それによって、全書の学術価値をも高めている。一方で、『宋元学案』は黄宗羲・黄百家父子らの編纂と考証によって、宋元時代の主要な学者と流派及びその序録・師伝関係・小伝・思想資料・附録などの内容がおおむね備わっており、後の全祖望らの編纂者の修訂補充にしっかりした基礎を築いたと言わなければならない。本稿は黄百家の『宋元学案』編纂について論述したが、もちろん黄百家のすべての学術思想を尽くすものではない。特に黄百家はその案語で学術評価、思想史の構築及び哲学の解釈などの方面に重要な功績を残した。これらに対する詳しい分析は別稿に譲ることとしたい。

〔注〕

(1) 一般的に「浙東史学」と呼ばれるが、呉光はこの学派が史学に限らず、実は経学や史学や文学や科学技術など（経世致用の学）の幅広い領域にわたるから、「浙東經史学派」と称するはずだ、と主張した。呉光『黄宗羲与清代浙東学派』を参照、呉光主編『陽明学研究叢書』、中国人民大学出版社、二〇〇九年。

(2) 楊小明は一九九五年四月、北京図書館（現中国国家図書館）で『学篋三稿』（即ち『黄竹農家耳逆草』）を発見した。楊小

明「黄百家年譜簡編」を参照。寧波党校學報二〇〇七年第三期、第八五頁。

(3) 馮錦榮の「明末清初における黄百家の生涯と著作」(京都大学中国哲学史研究会『中国思想史研究』第二十号、一九九七年)によると、黄百家の主な思想資料は父の黄宗羲の『宋元学案』、『明文海』、『明文授説』などを続いて編纂していた時に作った案語に保存されている。そのほかの「宋元儒伝私記」(未見、『宋元学案』に二条を残されている。注(49)を参照。)、『二程学案』二卷(未見、すなわち『宋元学案』の中の「明道学案」と「伊川学案」の単行本と推測される。『体独私鈔』四卷と『王劉異同』五卷(目錄書によれば両書は統鈔堂写本、未見、ただ「四庫提要・儒家類存目三」に著録された。)、「求仁篇」(『宋元学案』卷十三「明道学案」上)に附録された。)、「格物篇」、「五行篇」などの文章は或いは未刊行の写本で今は存在するかどうかかわからない。或いはすでに『宋元学案』に収められた。そして『宋元学案』などに保存された案語と文章は黄百家の最も重要な思想資料ともいえるよう。

(4) 黄宗羲原本はもともと『宋儒学案』と『元儒学案』の二つの独立した書であり、また、『宋元儒学案』ともいうが、後に全祖望によって合併して『宋元学案』と称した。詳しい考証は錢茂偉『『宋元学案』原題小考』(寧波大学學報(教育科学版)、一九九二年〇三期)を参照。

(5) 清全祖望『結埼亭集』卷十一碑銘「黎洲先生神道碑文」、「晚年、於『明儒学案』外、又輯『宋儒学案』、『元儒学案』、以志七百年來儒苑門戶。」詹海雲校注『全祖望「結埼亭集」校注』第二冊、臺北國立編譯館、臺北鼎文書局(発売)、二〇〇三年一月、第二七〇頁。

(6) もっと具体的に言えば、全氏の編纂作業は修定・補本・次定・補定の四つの方面がある。王梓材の「校刊宋元学案」を参照。(清)黄宗羲原著、全祖望補修、(今人)陳金生、梁運華点校『宋元学案』第一冊、(北京)中華書局、一九八六年一月第一版、第二一頁。以下、『宋元学案』を引用するとき、みな何冊何頁だけを示す。

(7) すなわち「黎洲黄氏原本」、「謝山全氏修補本」、「二老閣鄭氏刊本」、「月船盧氏所藏底稿本」、「樗庵蔣氏所藏底稿殘本」、「余姚黄氏校補本」である。王梓材、馮雲濠「宋元学案考略」を参照。『宋元学案』第一冊、第一五〇頁。また、王梓材と馮雲濠は『宋元学案』を校勘する過程に、一〇〇巻本の『宋元学案補遺』を編纂した。今『四明叢書』第五輯に収めら

れている。

(8) 以上の『宋元学案』成書の三段階と版本の命名は呉光の論文『宋元学案』成書經過、編纂人員与版本存佚考』を参照。

(杭州師範学院学报社会科学版、二〇〇八年第一期。)

(9) 初めに最後の校勘者王梓材・馮雲濤は書前の『宋元学案考略』の中にその編集依拠としての六つの写本の由来を紹介したというものの、その具体的な成書過程や編纂人員などの詳しい情況についてはまだ様々な問題が残されている。近年になって、一九八七年に呉光が『黄宗羲著作彙考』を出版し、その中に「宋元学案補考」の文章を収めて、王・馮二氏の論を補充した。その後、二〇〇七年に呉光はこの文章を増補修訂して『宋元学案』成書經過・編纂人員与版本存佚考』と題する論文を発表した。また、葛昌倫は修士論文『宋元学案』成書與編纂研究』（臺灣佛光人文社會學院歷史學研究所二〇〇四年）の中で、『宋元学案』の成書經過・編纂人員と版本に対して詳しく検討した。その研究によると、『宋元学案』の前後にわたる延べ編纂人員は五六人（出版の後援者を含む）にも達し、二九種の版本（写本・刻本・影印本・点校本など）がある。林久貴の論文『宋元学案』的作者及成書經過述論』（『黃岡師範學院学报』一九九八年第三期）と張如安の論文『黄氏而『学案』補考』（『古籍整理研究學刊』一九九三年第六期）なども『宋元学案』の編纂・版本について論述している。以上の研究成果によって、『宋元学案』の成書經過・編纂者の編集作業などがだいたい明らかになった。

(10) 黄璋と黄徵父も黄氏稿本を修訂して数十条の案語を書いたが、後に王梓材によって全部削られた。だから、今の百卷本の『宋元学案』には八人の案語だけを残している。呉光『宋元学案』成書經過・編纂人員与版本存佚考』（『杭州師範學院学报社会科学版』二〇〇八年第一期）を参照。

(11) 『宋元学案』には八九条の全祖望の序録があり、もともと一卷として全書の前に置かれるが、後に王梓材によって分かれて所属各学案の正文の前に置かれて、内容は同じである。そして、この八九条の序録は重複しているので、表の「案語数」ではこれを除いた。

(12) 個別のものは案主の前に、例えば、卷三「高平学案」に范仲淹の恩師である戚同文がその前に置かれている。

(13) 川勝守の論文「明儒における学伝と政治実践——『明儒学案』記伝名人データ・ベースをめぐる——」（平成九年度科学研

究費補助金（基盤研究B）研究成果報告書「黄宗義の『明儒学案』成立に関する基礎的研究」、研究代表者、柴田篤、一九八八年三月）の統計によると、『明儒学案』には二〇八名の明儒を収められている。

(14) そのほかの二〇の学案に案語を残していないが、後の全祖望・王梓材らによつて黄百家の幾つかの案語を削除した可能性もある。具体的な例は後述「文献の整理と校訂」の『習学記言序目』についての考証を参照。

(15) 『文献』一九九七年第一期、一九八〇二〇八頁。

(16) 『史学史研究』一九八六年二期。

(17) 河南人民出版社、一九九八年。

(18) 『史学月刊』一九八六年第二期。

(19) 人民出版社一九八七年六月第一版。

(20) 『史学史研究』一九九〇年三期。

(21) 南京大学出版社、一九九六年。

(22) 『中国史研究』一九九四年四期。

(23) 東方出版中心、二〇〇八年。

(24) 原文は「是編皆從全集纂要鉤玄、未嘗襲前人之旧本也。」（清）黄宗義著、（今人）沈芝盈点校『明儒学案』上「明儒学案發凡」、第一四頁。（北京）中華書局二〇〇八年一月第二版

(25) 原文は「百家謹案、真西山言、「絜齋之葬、慈湖銘之、其大節摹写矣。」考之慈湖遺書、無有也。即『舒広平墓誌』、亦慈湖所作、『広平言行録』載之、而遺書亦闕。古來文集既多不伝、伝者又復不全若此、可嘆哉。」『宋元学案』第三冊、第二五二八頁。

(26) 清馮可鏞『慈湖先生年譜』（清光緒間刻民国重印慈湖先生遺書本）卷二にも真徳秀のこの言葉と楊簡の文章を引用している。

(27) 『宋元学案』第一冊、第五一四〇五一八頁。

(28) 蔡仁厚『宋明理学・北宋篇』第三章「周濂溪（三）、太極図説的形上思想」（吉林出版集团、二〇〇九年）を参照。

(29) 原文は「百家謹案、『習学記言』存於今者、『序目』而已。内説經共十四卷、『易』四卷、『書』一卷、『詩』一卷、『周礼』、『儀礼』合一卷、『礼記』一卷、『春秋』一卷、『左氏伝』二卷、『国語』一卷、『孟子』一卷。若『記言』原本不知若干卷、惜乎不得見矣。是書前有山陰孫之弘序、葉氏門人。(梓材案、此條録自朱氏『經義考』。蓋係『学案』原本、而竹垞録之者。竹垞嘗寓吾郡二老閣、與鄭南溪稱後二老。故得見『学案』原稿。又案、是書凡經十四卷、諸子七卷、史二十五卷、『文鑑』四卷、合為五十卷、名『習学記言序目』、非別有全書也。」「『宋元学案』第三冊、第一七九四―一七九五頁。

(30) 原文は「曰、『習学記言序目』者、龍泉葉先生所述也。初、先生輯録經史百氏條目名『習学記言』、未有論述。自金陵歸、研玩群書、更十六寒暑、乃成『序目』五十卷。」葉適『習学記言序目』下冊、北京中華書局一九七七年十月、第七五九頁。

(31) また、清初の王士禎(一六三四―一七一)『池北偶談』卷十六「武侯集」にも『習学記言序目』に言及した。

(32) 北京中華書局版の『習学記言序目』最後に「宋元学案」「水心学案」にある黄百家らの案語を附している。

(33) 張岱年はこう述べている。「葉適的重要著作是『習学記言』、内容是对歷代學術的評論(中略)葉適門人曾説此書名『習学記言序目』。今按此説不可信拠。從書的内容看、是對於經子群書的評論、非僅『序目』。可能葉適原稿、在目録前写『序目』二字、並非全書標題。『四庫全書』著録為『習学記言』、是正確的。近年中華書局標点本、題為『習学記言序目』、實不恰當。」『中国哲学史史料学』北京生活・讀書・新知三聯書店、一九八二年、第一六六―一六七頁。)

(34) 陳金生『『習学記言序目』正名』、『中国哲学史研究』、一九八三年第四期、第一〇八―一〇九頁。

(35) ただ、陳金生は黄百家のこの案語には言及していない。また、上に述べた歴代書目の記載を考慮していない。その後、『漢語大詞典』にも上述の孫之弘の言葉を用いて、陳金生の考えを「序目」の意味の一つの解釈(「指對説書時輯録的条目加以論述的文字」)『漢語大詞典』第三卷、漢語大詞典出版社、第一二二頁。)として列した。

(36) 原文は「苟造德降、則民誠和而鳳可致、故鳴鳥聞、所以為和氣之応也。」「『宋元学案』第一冊、第七四〇頁。

(37) 原文は「百家謹案、苟当作着。『書君爽』、『着造德不降。我則鳴鳥不聞。』言着老成人之德、下及於民也、則鳴鳥有聲。此周公留召公之意。」「『宋元学案』第一冊、第七四〇頁。

(38) 黄氏と同じ意見もある。例えば、黄百家の後に清王植『正蒙初義』卷十五に、張載のこの一段を注してこう述べている。

「補訓、苟当作壽。徵引、『書』『君奭篇』、『考造德不降、我則鳴鳥不聞。』蔡伝言、召公去、則壽老成人之德不下於民。在郊之鳳、將不復得聞其鳴矣。」「召誥篇」、「其不能誠於小民。」（中略）集解、此以下皆解『書』。壽、老也。造、成也。謂召公也。」黄氏よりさらに詳しいが、意見は同じである。（影印清文淵閣四庫全書本第六九七冊、驪江出版社、第六七一頁。）

(39) 『張載集』、北京中華書局一九七八年、第五八頁。

(40) 原文は「百家謹案、横渠張子問於先生曰、「定性未能不動、猶累於外物、何如。」先生因作是篇。」「宋元学案』第一冊、第五四六頁。

(41) 『宋元学案』第二冊、第一五〇八～一五〇九頁。

(42) 『宋元学案』第一冊、第二二頁。

(43) 例えば、卷一「安定学安」に黄百家こう述べている。「百家謹案、安定先生初教蘇、湖、後為直講、朝命專主太学之政。（中略）當時安定学者滿天下、今広為搜索、僅得三十四人、然而錚錚者在是矣。」ここからわかるように、黄百家は胡瑗の三四人の弟子の伝記を作った。

(44) 原文は「百家謹案、『豫章年譜』謂政和二年壬辰、先生四十一歳、龜山為蕭山令、先生始從受學。『宋史』亦云、龜山為蕭山令時、先生徒步往學焉。龜山熟察之、喜曰「惟從彦可與言道」、弟子千餘人、無及先生者。謹考『龜山全集』、丁亥知餘杭、壬辰知蕭山、相去六年。而『餘杭所聞』已有豫章之問答、則其從學非始於蕭山明矣。豫章之見伊川、在見龜山之後。伊川卒於丁亥。若見龜山始於壬辰、則伊川之卒已六年矣、又何從見之乎。先君子別有『豫章年譜訂正』。」「宋元学案』第二冊、第一二七七～一二七八頁。

(45) 原文は「謹案、豫章先生本伝、『宋史』詳矣。独其載政和二年壬辰、受學龜山於蕭山、年四十一。後之纂録斯伝者、考証似有未合。茲輯此伝、從邵氏『安簡録』、毛氏『豫章事実年譜』、黄氏『宋儒学案』、并『龜山集』、『豫章集』、朱子『經義考』諸書輯録而重訂焉。『学案』云、考龜山丁亥知餘杭、壬辰知蕭山、相去六年。（中略）又何從見之乎。以上所考弁、殊有足據。」影印清文淵閣四庫全書本第四六〇冊、驪江出版社、第五二頁。

(46) 原文は「崇寧初、見龜山於將樂。」「宋元学案』第二冊、第一二七〇頁。

(47) 黄宗義の五代の孫、また『宋元学案』の編纂者の一人である黄璋は『楊龜山先生年譜考証』において『宋元学案』の「崇寧の初めに、龜山を將案に見ゆ」を引用したが、その具体的な考証がわからないので承認しなかった。彼は『龜山集』巻一二語録三「餘杭所聞」の羅從彦の問答の矛盾を知っていたが、それは語録の記載の間違いかもしれないと言った。また、羅從彦は政和二年壬辰（一一二二年）に初めて楊時に師事して後に程頤に師事することの矛盾を意識しなかった。彼は恐らく黄百家の案語に注意していなかった。やはり『宋史』の間違う記載によったのである。林海樞、胡鳴編著『楊時故里行実考』所収を参照。福建人民出版社、二〇〇八年一〇月、第三四八頁。

(48) 『宋元学案』第二冊、第一二七〇頁。

(49) 例えば、馮雲濠は二条の案語に黄百家の『宋元儒伝私記』の文字を引用した。卷五十六「龍川学案」、「雲濠謹案、主一『宋元儒伝私記』云「先生以用兵制勝、必須先審知地勢、（中略）又云、「謝臯羽嘗取其著書選為一編、號曰『石陵倪氏雜著』、蓋服其學博而有用也。」」（『宋元学案』第三冊、一八四五—一八四六頁）また、卷六十五「木鐘学案」、「雲濠謹案、主一『宋元儒伝私記』云、「先生學有淵源、文章有精魄、與金仁山並以學術為郡人倡、海內重購其文。有『石塘文集』若干卷。」宋景濂曰、「其從兄之綱、之純、並有文名、人稱為『三胡』。」」（『宋元学案』第三冊、二一一—三頁）この二条からみると、『宋元儒伝私記』は恐らく黄百家が『宋元学案』を編纂していた過程に作った筆記であろう。その内容は主に事績の補充である。また、卷二「泰山学案」に孫復の門人祖無執の伝記の案語にも『邵氏聞見録』を引用して『宋史』の記載を反駁した。

(50) 原文は「問文定與秦檜厚善之故。朱子曰、「秦嘗為密教。翟公異知密州、薦試宏詞。游定夫過密、與之同飯於翟、奇之。後康侯問才於定夫。首以秦為對、云其人類荀文若、又云無事不會。京城破、金欲立張邦昌、執政而下無敢有異議。惟秦抗論以為不可。康侯益義之、力言於張德遠諸公之前。後秦自北歸、與聞國政。康侯屬望尤切、嘗有書疏往還、講論國政。康侯有詞掖講筵之召、秦薦之也。然其雅意堅不欲就。是時已窺見其隱微一二、有難處。故以老病辭。至後來秦做出大疏脫、則康侯已謝世矣。」」（宋黎靖德『朱子語類』卷第一百三十二）『宋元学案』第二冊、第一一七九頁。

(51) 原文は「百家謹案、靖康金議立邦昌。馬時中仲抗言於稠人曰、「吾曹職為爭臣。豈可緘默坐視。當共入議狀、乞存趙氏。」秦檜不答、時中即自屬稿、就呼臺吏連名書之。檜既為臺長、則當列於首。以呈檜。檜猶豫。時中帥同僚合辭力請。檜不得已、

書名。是檜迫於馬時中、以臺長列名、何嘗抗論。乃知當時無論賢愚、盡為檜欺矣。幸文定宦情如寄、天下後世亮之。因歎知人之難也。』『宋元学案』第二冊、第一一九頁。

- (52) 卷四十二「五峰学案」に、胡安国の末子胡宏の伝記の中に朱子の言葉（宋黎靖德『朱子語類』朱子語類卷第一百三十一）を引いてこう言う。「朱子云、秦檜當国、却留意故家子弟、往往被他牢籠出去、多墜家聲。独明仲兄弟却有樹立、終不帰附。」『宋元学案』第二冊、第一三六七頁。）その後に、黄百家は胡安国父子と秦檜の交際の始末についてこう論じている。「百家謹案、文定以游広平之薦、誤交秦檜、失知人之明。想先生兄弟窮所痛心、故頭與檜絶。所以致堂有新州之徙。先生初以蔭補右承務郎、避檜不出。至檜死、被召、以疾卒。嗚呼、此真孝子慈孫、克蓋前人之愆者也。其志昭然、千古若見焉。」（同前。）
- (53) 「中国期刊網」に収められている高紀春「秦檜與洛学」（『宋史研究論文集——国際宋史研討会暨中国宋史研究会第九届年会編刊』、二〇〇〇年）、劉玲娣「胡安国政治思想及其实践略論」（『史学月刊』二〇〇二年〇六期）、寧淑華「胡寅與秦檜關係考論」（『學術論壇』、二〇〇九年三期）、寧淑華「與秦檜之書」的婉拒芸術——南宋理学家胡宏文章解読」（『名作欣賞』、二〇〇九年一四期）、高畑常信の『宋代湖南学の研究』などの論著には、みな黄百家の言葉及び王明清の記載などに言及していないようである。

(54) 王梓材は「校刊宋元学案条例」に「学案表」を作った理由について次のように述べている。「宋元儒異於明儒。明儒諸家、派別尚少。宋、元儒則自安定、泰山諸先生、以及濂、洛、閩、閩、相繼而起者、子目不知凡幾。故『明儒学案』可以無表、『宋元学案』不可無表、以揭其流派。黎洲、謝山原表僅存數頁、餘窃為之仿補、以便觀覽。」『宋元学案』第一冊、第二二頁。）ここから分かるように、学案表は黄宗羲と全祖望創立、大部分は王梓材・馮雲濠の補立である。

(55) ただ今までの学界は『宋元学案』の学案表をあまり注意していなかった。一方で、それに対する非難もある。例えば、陳祖武は『中国学案史』第七章『宋元学案』的纂修（東方出版中心、二〇〇八年）に学案表が複雑に過ぎることと時間的スパンが長すぎることをもって学案表の學術価値を疑い、『明儒学案』の整然たる秩序と比べて一つの「後退」と見なした。それに対して、筆者は各学案的「学案表」の内容・体裁を検討してその學術意味を究明し、さらにそれと宋元思想「系譜」の相互関係及び異同を検討し、政治・経済・文化などの要素と結合し、それをもととして宋元哲学史全体の哲学の「網状系

譜図」を築くことができると考える。

(56) 創文社、二〇〇二年二月、第一一五―一三一頁。

(57) 『紀念陳寅恪先生誕辰百年學術論文集』所収、北京大学出版社、一九八九年、第五三―六〇頁。

(58) 原文は「先生在太学、嘗以「顔子所好何学論」試諸生。先生得伊川作、大奇之、即請相見、處以学職、知契独深。伊川之敬礼先生亦至。於濂溪、雖嘗從学、往往字之曰「茂叔」。於先生、非「安定先生」不稱也。」『宋元学案』第一冊、第二六頁。

(59) 原文は「至於受学於周茂叔之言、親出於明道之口、豈以「仲尼」二字疑子思之不為宣聖孫乎。」『宋元学案』第一冊、第五二五頁。

(60) 原文は「程太中能知周子而使二子事之。二程之学遂由濂溪而繼孟氏。」『宋元学案』第二冊、第一二九七頁。

(61) 『宋元学案』第一冊、第五三二―五三三頁。また、卷首の「宋元儒学案序録」に全祖望は「濂溪学案」についてこう述べている。「濂溪之門、二程子少嘗遊焉。其后伊、洛所得、実不由於濂溪、是在高弟滎陽呂公已明言之、其孫紫微又申言之、汪玉山亦云然。今觀二程子終身不甚推濂溪、并未得與馬、邵之列、可以見二呂之言不誣也。晦翁、南軒始確然以為二程子所自出、自是後世宗之、而疑者亦踵相接焉。然雖疑之、而皆未嘗考及二呂之言以為証、則終無據。予謂濂溪誠入聖人之室、而二程子未嘗伝其学、則必欲溝而合之、良無庸矣。述『濂溪学案』。また、卷十二「濂溪学案」下に全祖望の「周程学統論」『皕埼亭集外編』卷三十八論を載せており、その結論は、「然則謂二程子雖少師周子、而長而能得不伝之祕者、不盡由於周子、可也。謂周子竟非其師、則過也。」と言うものである。

(62) 原文は「志伊尹之志、学顔子之学。」『宋元学案』第一冊、第五二三頁。

(63) 原文は「百家謹案、先生為元公上官。有謂不当列弟子者。夫学以伝道為事。豈論勢位。自古至今、有弟子而不能伝道多矣。以先生之虚懷問業、悉心聽受、二年有得、與二程同列諸弟子之班、足見先生之盛德。又何嫌哉。又何嫌哉。（梓材案、主一是說亦有理。顧謝山於稿底「濂溪門人」抹去李先生之名。是仍列講友而不列弟子也。）」『宋元学案』第一冊、第五二九頁。

(64) 原文は「百家謹案、輔潛庵一儒生耳。漕試四学不第、陳秋塘送之詩云、「聞說平生輔漢卿、武夷山下嘔殘羹。」其衰颯一至此也、而所伝之学、蜀則有魏鶴山了翁、閩則有熊勿軒禾、陳石堂普、吾東浙自韓侂胄翼甫伝子莊節性、余端臣再伝、而有黃

文潔震、逮至有明、伝其學者不絶。此先遺獻云、「道之行不行、豈以時位哉。何先生之牢落而自遠有耀乎。」『宋元学案』第三冊、第二〇五七頁。

(65) 原文は「百家謹案、『宋史』言、鶴山「築室白鶴山下、以所聞於輔広、李燾者開門授徒、士爭負笈從之。由是蜀人盡知義理之學」。於是『嘉興志輔漢卿伝』遂謂鶴山是漢卿之門人。然考『鶴山集』言、「開禧中、余始識漢卿於都城。漢卿從朱文公最久、盡得公平生言語文字。每過余、相與熟復誦味、輒移晷弗去。余既補外、漢卿悉拳以相畀。」又言、「亡友輔漢卿、端方而沈碩、文公深所許與。」乃知友而非師也。『梓材案、『二江諸儒學案』「范双流先生子長伝」云、「鶴山之初志學也、由先生兄弟及薛符漢以得門戸、及入中原、始友李敬子、輔潛庵。」案、双流弟名子該。薛名紱。」『宋元学案』第四冊、第二六五一頁。

(66) 黄宗羲はこう述べている。「宗羲又案、旧志言魏文靖公出先生門。案文靖跋文公與先生帖云、「亡友漢卿、端方而沈碩、文公深所許可。」此可以証其非弟子矣。其為此言者、文靖田先生而得文公之書。『宋史』『文靖列伝』影響其詞、謂了翁築室白鶴山下、以所聞於輔広、李燾者開門授徒、蓋本『文靖語類』而分疏不詳。志則本『宋史』而展轉失矣。文靖於先生與敬子皆友而非師也。(下略)『宋元学案』第三冊、第二〇五四頁。)

(67) 『宋元学案』第三冊、第二四一一頁。